

# 伝承会報

第六号 平成二十五年四月十日発行

編集発行 鈴木伸昌

## 河野先生と治水神社

河野先生の逸話をご紹介する前に、治水神社のことについて説明したいと思えます。

治水神社とは、宝暦年間の治水工事にまつわる神社でありま

す。  
宝暦の治水工事とは、江戸時代の宝暦年間（一七五四年（宝暦四年）二月から一七五五年（宝暦五年）五月）、幕府の命により薩摩藩が行った治水工事のことをいいます。

場所は、濃尾平野の治水対策で、木曾川、長良川、揖斐川の三つの川の分流治水工事でした。

木曾川・長良川・揖斐川の三つの川は濃尾平野を貫流し、下流の川底が高いことに加え、その三つの川が複雑に合流・分流

を繰り返す地形であることや、小領の分立する美濃国では各領主の利害が対立し統一的な治水対策を採ることが難しかったことから、しばしば洪水が多発していた。

一七五三年（宝暦三年）十二月二十八日、第九代将軍徳川家重は薩摩藩主島津重年に御手伝普請という形で正式に川普請工事を命じた。目的は、薩摩藩の財政弱体化であった。当時既に六六万両もの借入金があり財政が逼迫していた薩摩藩では、工事普請の知らせを受けて幕府のあからさまな嫌がらせに「一戦交えるべき」との強硬論が続出した。財政担当家老であった平田鞆負は強硬論を抑えた。翌年一七五四年（宝暦四年）一月一六日薩摩藩は家老の平田鞆負に総奉行、大目付伊集院十蔵を副奉行に任命し、藩士を現地に派遣して工事にあたらせた。工事に従事した薩摩藩士は追加派遣された人数も含め総勢九四七名であった。

宝暦治水自体はあくまでも幕府による工事のお手伝い普請という名目で、幕府側の総責任者は勘定奉行・一色政沆、監督者として水行奉行・高木新兵衛が命じられている。高木は自家の家臣のみでは手に余ると判断し、急遽治水に長けた内藤十左衛門を雇っている。

工事は同年二月二七日に鍬入れ式を行い着工。

永吉惣兵衛、音方貞淵の両名が管理していた現場で三度にわたり堤が破壊され、その指揮を執っていたのが幕府の役人であることがわかり、四月一四日両名は抗議の自害。以後合わせて六一名が自害を図ったが平田は幕府への抗議と疑われることを恐れたのと、割腹がお家断絶の可能性もあつたことから自害である旨は届けなかった。また、この工事中には幕府側からも、

現場の責任者が地元の庄屋とのもめ事や、幕府側上部の思惑に翻弄されるなどして、内藤十左衛門ら二名が自害している。さらに、人柱として一名が殺害された。これらの犠牲者数は、寺の過去帳、位牌・墓碑などに記録された物だが、幕府は寺に薩摩藩の死者を葬ることを禁じたため、実際にはさらに多数にのぼっていた可能性があるという。幕府側は工事への嫌がらせだけでなく、食事も重労働にも拘らず一汁一菜と規制し、さらに蓑、草履までも安価で売らぬよう地元農民に指示した。

八月には薩摩工事方に赤痢が流行し、粗末な食事と過酷な労働で体力が弱っていた者が多く、一五七名が病に倒れ三二名が病死した。

一七五五年（宝暦五年）五月二二日工事が完了し幕府の見方を終えた二四日に総奉行平田鞆負はその旨を書面にして国許に報告し、その翌二五日早朝美濃大牧の本小屋で割腹自殺した。辞世の句は「住み馴れし里も今更名残にて、立ちぞわずらう美濃の大牧」であった。

最終的に要した費用は約四十万両（現在の金額にして三百億円以上と推定）。大坂の商人からは二二万二九八両を借入。

一九〇〇年（明治三三年）の分流工事完成時に、宝暦治水碑が千本松原南端に建てられている。一九三八年（昭和一三年）には、平田鞆負ら八五名の薩摩藩士殉職者を、「祭神」として顕彰するために『治水神社』（所在地：岐阜県海津市海津町油島（旧海津郡海津町））が建立された。

岐阜県海津市と鹿児島県霧島市は、これが縁で友好提携を結んでいる。なお鹿児島県と岐阜県は、これが縁で県教育委員会

同士の交流研修として、お互いの県に小中高校教員を転任させている。

また鹿児島県で発生した平成五年八月豪雨の際は岐阜県より復旧支援の土木専門職員が派遣され支援に当たった。

この宝暦治水工事並びに治水神社のことを河野宗家はご存知だったという。

宗家に乞われて、治水神社案内した濱沢先生のお話を紹介したい。

「河野宗家は、治水神社の話をして見えて、そこへ案内して欲しいということなので、我々がご案内した。

当時の碑が傾いっとたんですけれども、土にこう倒れて。それを宗家がみられて、急に「これを起こそう。」とおっしゃった。道具も何も持つとらん。刀しか持つとらん。

ふつつは、せいぜい、「起こさんといかんね。」と言っておわるころを、河野宗家はその場で、手で起こされはじめたんですね。そして我々もじっとしておれんでお手伝いして、起こしました。ああなるほどなあ、私、河野宗家っていうのは、違うなあと。」

小生もこの話を伺っていたく感動したものの一人です。

すぐ行動に移される凄さ。伝承会報第一号三頁下段で河野宗家の哲学「今を大切に」の逸話を紹介しましたが、それとは違った「今を大切に」のもう一つの面を知った気がいたしました。